

電子楽器工作文化と音楽実践の関わり

大阪芸術大学 大学院 嘱託助手 藤野 純也

研究の背景・ねらい・方法

日本の代表的なシンセサイザーメーカーとして知られるコルグ、ローランド、ヤマハ三社が、製品としてシンセサイザーを初めて世に送り出したのは 1973-74 年である。その後の国産シンセサイザーの発展史に関してはこれまでもある程度の記述がなされてきた。その一方で、国産シンセサイザーの登場に至る経緯やその背景、シンセサイザーに先行する電子オルガンの時代に関するまとまった研究はこれまでなされてこなかった。

研究代表者は、その博士論文において、日本の電子楽器受容研究に生じた空白を充填するために戦線・戦後のラジオ雑誌をはじめとした一次資料を調査し、ラジオ工作文化が日本の電子楽器受容の礎になっていることを明らかにした（藤野 2018:75）。

その成果を踏まえ、本研究では戦後のラジオ工作文化をとりまく人々が日本の電子楽器業界の成立にどのように関わっていたのかを明らかにすることを目的に、戦後日本の電子楽器業界に深く携わった二人の技師に対するインタビュー調査を実施した。

日本の電子楽器産業の礎としてのラジオ工作文化

昭和 34 年 1 月 20 日、東京文化会館において「第一回 電子楽器研究会」が開催された。その発起人の一人である A 氏（仮名）の証言によれば、『無線と実験』の当時の編集長が A 氏に打診したことで、「電子楽器研究会」が発足され、年に一度開催の頻度で、数年続いたという。

学生時代に同会に参加していた B 氏（仮名）は、同会には、電子楽器に関心のあるアマチュアや、エーストーン、クロダトーン、テスコなど国内楽器メーカーの社員が出席しており、同会における出会いが、B 氏が楽器業界へと就職するきっかけになったことを、研究代表者が実施したインタビューにおいて回想している。

以上の調査結果から、1950 年代後半から 1960 年代の初めにかけて、プロとアマチュア、メーカー間の垣根を超えた横のつながりがあり、その中で培われたコミュニティが日本の電子楽器業界の発展に貢献したことが明らかになった。

電子楽器工作文化と音楽実践の関わりについて

一方、工作文化と音楽実践に関しては、積極的な相互関係は見出されなかった。欧米において、作曲家や演奏家と技術者の協働により電子楽器が発展したのとは対照的に、1950 年代後半から 1960 年始めごろの日本においては、音楽家と技術者の目立った共同はほとんど見られないのである。

すなわち、演奏家や作曲家の要望よりも、技師の関心が先立つ、はじめに楽器ありきの技術先行型であったことが、シンセサイザー以前の日本の電子楽器受容の特徴なのである。

今後の課題

もっとも、今年度実施したインタビューの対象が技術者に偏っていることが、上述の結果につながった可能性は十分に考えうる。より研究の信頼性を高めるために、今後は調査の対象を演奏家にまで広げる必要があるだろう。

また、1931 年生まれの A 氏と、1940 年生まれの B 氏の間には、オンド・マルトノのような単音電子楽器にたいする見解の相違があることを、そのインタビュー・データは示している。A 氏は単音電子楽器を「商売にならない」と述べている一方、B 氏は電子楽器は単音が望ましいと語っているのである。

このような差異が生じた背景とそれが後のシンセサイザーの発展に与えた影響を探ることも本研究を通じて見えた新たな課題である。

今後は、インタビューにより得られた質的情報を KJ 法やライフストーリー法を用いて分析することで、日本の電子楽器産業黎明期の技術者や演奏家が電子楽器に向けた「まなざし」を社会的な観点から明らかにしたい。

参考文献：

藤野純也「1926 年から 1936 年の日本における『機械音楽』としての初期電鳴楽器受容-特許文献と雑誌記事の分析に基づいて-」

大阪芸術大学大学院 2017 年度博士論文